

金井宇宙飛行士

バイコヌールから宇宙へ旅立つ

菊地 涼子



地上400kmの軌道を回り続けるISS国際宇宙ステーション。地球から最も近い居住空間です。ここで現在、JAXAの金井宣茂宇宙飛行士が半年にわたって仕事をしています。

ISSへ出発したのは昨年12月17日、ロシアのバイコヌール宇宙基地からでした。私は、1990年の日ソ共同飛行のバックアップクルーを務めた縁で、今回打上げを見送るツアーの案内役として現地へ行ってきました。バイコヌール訪問は8回目になります。今号では宇宙への玄関「バイコヌール宇宙基地」をご紹介します。



バイコヌールは、モスクワの南東約2100km、中央アジアのカザフスタン領内にあります。カザフスタンとロシアはもとと同じ国IIソビエト連邦でしたが、連邦崩壊で別の国になり、ロシアが基地一帯の土地を租借しています。草もほとんど生えないステップ氣候の土漠に、15カ所の発射台や組立工場、燃料工場など関連施設が点在し、総面積は福岡県に匹敵する世界最大の宇宙基地です。

金井飛行士が乗り込んだソユーズロケットの発射台の通称は「ガガーリン射点」。世界初の衛星スプートニクも人類初の宇宙飛行を成し遂げたガガーリン飛行士も、この発射台から打ち上げられました。

人類や衛星を宇宙へ送り続けてきたこの基地には歴史と伝統が詰まっています。

博物館にあふれる展示物から一つご紹介いたします。丸と直線に小さな突起が付いただけのシンプルなカギ。これはバイコヌールから最初に打ち上げられたR-7ロケットの「キー」です。コントロールームの制御卓中央に穴があり、このキーを差し込むと、ロケットが起動します。ロケット開発初期からのスタイルで、今もってロシアはこのレトロな方法ですべてのロケットを起動します。「うまくいっているものは変えない」それがロシア流です。

金井さんを打ち上げたソユーズロケットも、60年前に衛星スプートニクを打ち上げたR-7ロケットが原型です。古い技術という言い方を通り越して「枯れた技術」とも揶揄されますが、少しづつアップデートを繰り返してきたこのロケットが、現在人間を安全にISSに運ぶ唯一の手段となっています。

そんな、今につながる歴史の数々を見て取れるのがバイコヌールなのです。

金井飛行士も、出発までにバイコヌールで数々の伝統行事をこなされたことと思います。ソユーズロケットの主任設計士コロリョフの像への献花、宇宙飛行士ホテルでの国旗の掲揚、映画「砂漠の白い太陽」鑑賞（宇宙とは何もない映画ですが、なぜか70年代から観る習慣）、国家委員会からミッションの認可を受け、記者会見、ホテルのドアにサイン、ロシア正教の司祭の祝福、「家のかたわらの草」という題名の曲をBGMにホテルから出発、宣誓式で敬礼…。



▲記者会見(左が金井飛行士)



▲宣誓式



▲管制センターの制御卓
▲制御卓中央の穴に差し込むキー

写真提供：
菊地涼子、大陸トラベル、ツアー参加者

当然の行事と、不思議な行事が混在します。「宇宙飛行士の並木道」に植樹するのも大事な行事ですが、この時期日中でもマイナス10℃以下という寒さでは植樹ができず、金井さんは帰還後に行くことでしよう。

不思議な行事の極めつけは、発射台に向かうバスを途中で下り、宇宙服のままそのバスの後輪に立小便をすること。理由は「ガガーリンがやったから」。ロシアの人はゲン担ぎが大好きです。

ロケットの打上げを見送る場所、発射台からほんの1.4kmという近さです。カウントダウンはなし。人々は静かに時を待ちます。

「ブスク(発射)！」
シュワッドドーン、
ドドドドド、
ゴーーーーー！

真っ白い雪原をロケットがゆっくり離れ、まぶしいオレンジと白の光を放ちながら雲一つない青空を昇っていきました。

音の遅れはほとんど感じません。いつもなら感じるモワッという熱波が、今回は凍てつく空気に飲み込まれてしまいました。この時点では歓声はまばら。

ロケットが見えなくなっても見送りの人々は静かにその場に立って耳を澄ませます。そして発射から8分50秒後。管制官の「第3段ロケット切り離し、宇宙船、軌道投入」のアナウンスで初めて拍手が沸き上がりました。人命がかかっています。無事に軌道に投入されて初めて喜べる打上げです。

バイコヌールには、基地で働く人々が住む「街」もあります。街でもロケットや貨物機などの本物がそのままコメントになっていたり、国際宇宙学校という特色のある学校があったり、見学して実際に多くを学び感じることができ、バイコヌールは行くのが難しいのですが、行けばその苦労に報いてくれる場所です。

經由地のモスクワでも、「星の街」II宇宙飛行士訓練センターと、ロケットや宇宙ステーションの設計・製造をしてきた「エネルギー社」を訪問しました。エネルギー社の博物館にも歴史を語る「本物」がゴロゴロしています。

ガガーリン飛行士やテレシコワ飛行士らが地球帰還時に乗っていた焼け焦げたカプセル。60年代から月面に送られてきた探査機などの予備機。コンピュータのない時代に科学技術の粋を尽くした活動に感嘆します。

この博物館でもうひとつ強く印象に残ったのは、「掃除機」でした。ソビエト連邦という国が崩壊し、この国の宇宙開発予算はどうなるのかという時代に、エネルギー社は民生品を製造・販売して独自に予算を得ようとした。この掃除機は、当時日本のSANYOとライセンス契約したエネルギー社が、製造・販売したものです。

先人から引き継いできた宇宙活動を絶やすまいとする必死の努力を見た気がしました。



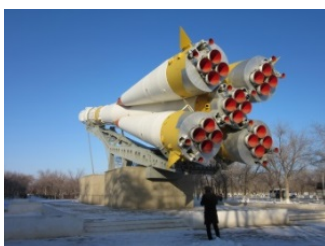
▲月面探査機 ルナ9号



▲ガガーリン帰還カプセル



▲エネルギー社が製造した掃除機



▲ソユーズロケット像



▲バイコヌール市内のガガーリン像



▲ロケット打上げ



▲宇宙飛行士の並木道



▲組立工場からの搬出